学位論文の要約

論文題目： 『家なき子』、その原典と初期邦訳の文化社会史的研究——エクトール・マロ、五来素川、菊池幽芳をめぐって

申請者： 渡辺貴規子

学位論文の要約：

『家なき子』の邦題で知られるフランスの児童文学作品、エクトール・マロ (Hector Malot, 1830-1907) 原作の *Sans famille* (1878) は、フランスでの原典成立の社会的・文化的背景と意味について作品論として論じられる機会や、明治時代後期の日本における翻訳受容の様相について考察される機会が少なかった。本論文では、第一部において、原典の記述の詳細な読解を基礎的な方法とし、1870年代における原作者の思想的傾向やフランスの社会的・文化的背景も踏まえながら、この物語が当時のフランスの児童読者に何を教え、伝えようとしたのかという観点から考察を深めた。その結果、原典の内容が、第三共和政初期の初等教育改革と密接に関係する点、当時のフランスの時事問題とそれに関する議論が反映され、国家や社会に対する鋭い批判や解決策の提示が見受けられる点が判明した。本論文第二部では日本での最初期の翻案・翻訳であり、既存の邦訳を介さずにフランス語の原典から翻案・翻訳がなされた、五来素川訳『家庭小説 未だ見ぬ親』（1903年）と菊池幽芳訳『家なき児』（1912年）について、底本として使用された原典の版を特定した上で、原文と翻訳文との綿密な比較を通し、初期邦訳の様相の一端を明らかにした。本論文ではこれらの考察により、『家なき子』という日本で流布した小説の源流を探ろうと試みた。以下に第一部、第二部における章ごとの要約を示す。

第一部序章では、*Sans famille* という物語に、一方で第三共和政が成立したばかりのフランスにおける秩序と安定を志向する保守的な面があり、他方では国家や社会により個人の自由と権利が侵犯されることを強く非難する側面があることを指摘し、両側面が共存するこの物語を通し、原作者マロは児童読者に何を伝えたかったか、という問題提起を行った。

第一部第一章では、*Sans famille* の作品の分析に入る前に、その前提として、原作者マロの1878年までの伝記的事実を把握した。マロが受けた教育の特徴、思想・表現の自由への拘泥、マロの批判精神、第二帝政下でのジャーナリストとしての活動、それによる共和主義、社会主義への接近、普仏戦争の経験を検討し、1870年代には、マロが暴力的な革命は望まず社会の安定を望んだ点、小説の執筆のみを通して国家や社会への批判を表明した点、初等教育視察官として児童教育について考察する機会を多く持った点を明らかにした。また、*Sans famille* の誕生の契機となった『教育娯楽雑誌』の編集者、ピエール＝ジュール・エツェルとの執筆契約の内容、その後のエツェルとマロの決裂、その結果、大別して二種の版が *Sans famille* の原典に誕生した経緯を明らかにした。

第一部第二章では、第三共和政初期の共和主義的初等教育改革において構想された教育

内容と、*Sans famille* の内容の一致点を明らかにした。*Sans famille* の内容が、ジュール・フェリー法（1881-1882年）以後の初等教育に適合するものであることは、先行研究においても指摘されたが、本論文では、この作品の執筆と発表がフェリー法以前であることを考慮し、1877年の初等教育改革法案、バロデ案とバルニ案における教科教育の規定と *Sans famille* の記述の内容を照合し、マロが、この二法案の内容を把握しつつ物語を執筆した可能性を指摘した。また、この小説では、公民道徳教育が採用されて、その軸として、家族、法的規範の遵守、社会規範の遵守の三点が設定された点を示した。三点目の社会規範の遵守に関しては、1887年に公布された学習指導要領における初等科中級課程の「道徳」科と「公民」科の規定と *Sans famille* の記述内容を照合し、公民道徳教育の面における *Sans famille* の内容と共和主義的初等教育の内容との一致も示した。

第一部第三章では、*Sans famille* において展開される社会批判について、学校教育批判、いわゆる「社会問題」に関する批判、児童の権利擁護についての問題提起の三領域を取り扱った。第一の学校教育批判では、*Sans famille* では敗戦後のフランスにおいて高揚したナショナリズムの影響が丁重に回避された点について明らかにした。そして、小説内で学校教育そのものが批判され、学習者の模範として、「独学者」の表象が繰り返し提示された点を確認した。こうした学校教育批判からは、マロが児童教育における国家主義を否定し、児童の自発性と意志、またその将来と幸福を尊重する個人主義的な児童教育が *Sans famille* に提示されたことが明らかになった。次に「社会問題」については、*Sans famille* では「社会問題」による家族崩壊の危惧が示された。とくに、労災事故による就労不能や天災被害などの非常事態における家族の崩壊が積極的に描かれ、当時問題となっていた労災補償制度や生活保障制度の不備が複数の挿話によって示された。「社会問題」による家族の崩壊の危惧の視点は、社会改革の根本に家族の再建を据えたフレデリック・ル・プレーの影響が看取され、また、家族の中で培われる愛情と友情は社会関係の基本とされ、社会の構成員が互いを家族のように支え合う「友愛」の源として提示された可能性もある。第三の児童の権利擁護の問題については、小説内で子を虐待する父親、子を働かせ搾取する父親、子に犯罪行為をさせる父親を示すことで、当時の民法上で強い行使力のあった父権をマロは厳しく批判した。また、公的な児童保護事業の欠陥と不足を示す一方で、民間事業、とりわけカトリック教会の実施する児童保護事業に共感を示した。共和主義とカトリック教会のヘゲモニー闘争を超越した柔軟な姿勢を児童保護事業の領域でマロは示し、この問題を早急に解決すべきものとして認識していたことがうかがわれる。

第一部結論では、「共和国の小学校」の教育内容に準じる教育の作品内における提示と、道徳教育における保守的な傾向の背景として、マロ自身が共和主義者であった点、『教育娯楽雑誌』の方針の影響、平和な共和国に資する国民の育成を意識したと考えられる点を挙げた。そしてその一方で、共和国の方針や現状に対する展開された批判は、マロが反体制的な人物であることを示すものではない。十九世紀後半のフランスではとくに「社会問題」や児童保護事業への対応について、公的事業よりも私的事業の方が実践力と事業の蓄積が見ら

れたという背景があり、マロも社会事業における民間事業の力を評価しており、その要となる事業主、つまり個人の良心に対して期待を寄せた。*Sans famille* において展開された個人主義的な児童教育の目的もまた、単なる個人の幸福のみにその目的があるのではなく、互いを家族と思うような「友愛」の精神で、世の中で苦しむ人を助ける力を培ってほしいという作家の希望が看取される。結末において「小さな辻音楽士が寝泊まりする会館」を設立しようとする主人公は、社会を改善していける能力と意志を持った理想的な人間として提示されたと考えられる。

第二部序章では、以上のような原典の特徴を把握しつつ、明治時代後半の日本において *Sans famille* を紹介した二人の翻案・翻訳者は、原典の何を評価し、どの点に着目したのか、また何を削り、何を付加して日本の読者に紹介したか、その背景として翻案者・翻訳者個人の思想や当時の社会的状況はどの程度関わっているか、という問題提起をした。

第二部第一章では、日本で初めて *Sans famille* を紹介した翻案、五来素川の『未だ見ぬ親』について、この作品に『読売新聞』での連載中から「家庭小説」という角書が付されたことを手がかりとして検討した。「家庭小説」の特徴について把握しつつ『未だ見ぬ親』について考察すると、五来は道徳を含む小説で読者を教化しようとし、『未だ見ぬ親』には日本の家族で基準とされるべき道徳、とくに親子道徳が含まれたと考えられる。原作に見出されたのは個人主義に基づく親子関係であり、親子間の情愛と、子の「人格」を認める教育が評価された。その一方で、作品の日本化も次の二点において認められた。第一に五来は原典で提示される児童教育において、児童自身の自発性が尊重される点について限定的な理解しかしていないと思われ、『未だ見ぬ親』の主人公の太一は、*Sans famille* の主人公のレミよりも主体性を発揮することの少ない、大人によって教え導かれる子どもとして提示された点である。第二に、五来が日本の家族主義の道徳の基礎と見なした、子から親への報恩の観念も付加された点である。『未だ見ぬ親』には個人主義を基本としつつ、当時の日本の家族にふさわしい親子道徳が込められたと考えられる。

第二部第二章では、『家なき児』の翻訳者である菊池幽芳は、「換骨奪胎の名手」と呼ばれるほど翻案の多い作家であるのに、*Sans famille* に関しては出来る限り原典に忠実な翻訳を行おうとする態度を示し、菊池が原典そのものを高く評価したと考えられる点から考察を深めた。菊池は明治 30 年代に「家庭小説」の作品で人気を博し、とくに明治 30 年代後半以降は、「家庭」における女性や、婚前の娘のあり方について教訓を与える作品や論説の発表を続けた。また、日露戦争終結後は、青年の間の個人主義思想の蔓延に起因する道徳の危機が唱えられた時代であったが、菊池は女性への影響をとくに危惧し、「家庭」を大切にす女性こそが理想であると論説等において主張した。菊池により「家庭小説」と捉えられた *Sans famille* においてもまた、女性の登場人物が子、親、兄弟、夫に対して献身的に尽す姿を菊池は評価し、原文の表現を尊重しつつも、賢母であることや、娘の献身ぶりが引き立つように工夫しながら翻訳したと考えられる。しかしその一方で『家なき児』は女性ジェンダー化された菊池の他の「家庭小説」と比較すると、児童と成人男性も読者として想定された点

で異質であり、そのような読者に対する配慮も見受けられた。菊池は *Sans famille* の読者として、性別や年齢、「家庭」内での立場を超えた、普遍的な「家庭の読者」を想定し、本来的な意味での「家庭小説」として原典を高く評価し、『家なき児』として翻訳したと思われる。

第二部結論では、*Sans famille* というフランスの小説が五来、菊池の両者から「家庭小説」としての価値を見出され、日本の家族に道徳的教訓を与える小説と捉えられながらも、五来の場合は、日本の家族に対して家族主義から個人主義への変化をもたらすような教訓を含むと見なされたのに対し、菊池の場合は、*Sans famille* における女性像をはじめ、「家庭」を否定する要素や風俗壊乱の危険のない安全で保守的な小説と見なされたと思われることを論じた。しかし彼らはまた、翻案・翻訳する際に原典の内容や記述を、彼らの考える日本の読者に適するように改変・加筆した。作品の日本化は、登場人物の名前や地名ばかりでなく、翻訳における改変や加筆を通し、作品から与えられる道徳についても見受けられるという点が、『未だ見ぬ親』と『家なき児』の共通点として明らかになった。

結論ではまず、原典の *Sans famille* が家族の重要性を巧みに強調した側面を、五来、菊池の両者が的確に読み取った点について、明治 30 年代から明治 40 年代の日本において、近代国家の基礎単位としての家族のあり方が大きな問題となった背景を踏まえつつ再考した。家族社会学研究においては、近代日本の家族は、旧来の儒教的な家族道徳に基づく「家」と、「家」を批判的に捉え、「一家団欒」の親密さを持って集まる「家庭」との二重性を内包しつつ成立したと言われる。五来と菊池は、物語に含有させる家族に対する道徳的教訓の調整という点において大きな配慮をしつつ翻案・翻訳し、それらは当時の日本の家族に許容されるものであったと思われる。そしてそれは、*Sans famille* が『家なき子』の邦題を冠し、日本で多数の翻訳・翻案・再話の形で紹介され続けた原点であるといえるのではないだろうか。しかし、一方で原作の *Sans famille* は五来や菊池が考えるよりはるかに多義的な小説であり、その点について五来と菊池は部分的な理解しか示さず、また現在にいたるまで指摘されてこなかった要素も存在する。本論文では、原典 *Sans famille* に「家族の物語」として以外の要素が多分に含まれたことも明らかにしようとした。